

かつて、ノルマンディーで

2008(平成20)年3月9日鑑賞<テアトル梅田>

★★★



監督・カメラ・編集＝ニコラ・フィリベール／出演＝クロード・エベール／ジョゼフ／ニコル・ピカル／アニック／ジャクリヌ／ジルベール／ボレル一家の父親（バップ、ロングライド配給／2007年フランス映画／113分）

……現代最高峰のドキュメンタリー作家ニコラ・フィリベールが、30年前に助監督として参加したある映画の出演者たちを再訪問！ そこで語られる30年間という歳月の意義と重みは……？ そして、映画製作の意義は……？ 行方不明らしい、かつて18歳の主役の少年の不在を心配していたが、結局は……？ 07年カンヌでは絶賛だったらしいが、私には懐古趣味としか……？

ニコラ・フィリベール監督を知ってる？

この映画を観る前にいつものようにパンフレットを購入したが、それには「ニコラ・フィリベールのまなざし～正しき距離」というタイトルがついており、彼の過去の作品を集大成して紹介するものだった。

きっとこれは、テアトル梅田で「ニコラ・フィリベール レトロスペクティヴ」と題して「現代最高峰のドキュメンタリー作家の代表作から初期短編まで未公開作を含む全9本、6プログラムをスペシャル・ロードショー」するためにつくられたもの。つまり、フランスのニコラ・フィリベールはそれほど有名な監督なのだが、残念ながら私は彼の名前も作品も全然知らなかった。私の映画の知識って、その程度……？

ルネ・アリオ監督を知ってる？ こんな映画を知ってる？

1975年、ニコラ・フィリベールが24歳の時、彼はルネ・アリオ監督がつくる『私ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』の助監督の指名を受け、ノルマンディーではじめての大仕事をしたらしい。それは、主要な出演者をすべて地元の農民たちから選ぶというルネ・アリオ監督の方針に沿って、ノルマンディーで出演者たち

を探し、決定するという仕事だ。

この作品は、その長ったらしいタイトルどおりの物騒な映画。主演の少年クロード・エベールはルネ・アリオ監督がオーディションで選んだが、殺される母親や妹その他主要登場人物はニコラ・フィリベール助監督が選んだわけだ。

それから30年。既にルネ・アリオ監督は1995年に亡くなったが、なぜかニコラ・フィリベール監督はかつてのロケ地を訪れ、当時の出演者たちに会ってみたいとなったらしい。それがこの映画をつくったきっかけだ。この映画は2007年のカンヌ国際映画祭で「もっとも光り輝く隕石」(ル・モンド紙)と絶賛されたとのことだが、ヘタすると単なる懐古趣味に……？

見て考える素材の提供者……？

2008年2月1日付け読売新聞は、ニコラ・フィリベール監督が「ドキュメンタリーには作家独自の視点が介在し、撮影・編集の時々で選択の連続だ。そこには自分の映画作りにはいかに誠実であるかが重要になる」、さらに「対象とは、信頼関係に基づく共犯者関係でありたい。マイケル・ムーア監督のように唯一の視点を押し付けるのではなく、見て考える素材の提供者でありたい」と語ったことを報道した。しかし、その実態は……？

この映画の冒頭はあっと驚くブタの出産シーンから始まる。そして、ニコラ・フィリベール監督自身のナレーションと『私 ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』の映像を交えながら、30年後の「あの映画」の出演者たちと旧交を温めていく。それはそれで面白いし、30年という歳月の意義や重みがよくわかる。また、映画づくりという共通の目的に向けてみんながいかに一丸となったのか、またそのことが各出演者にはいかに大きな意義や重みを与えたかもよくわかる。しかし、それはひょっとしてニコラ・フィリベール監督の個人的な懐かしみと思い入れにすぎないのでは……？

出演者たちの反響は……？

ノルマンディーに住む農民たちにとって、突然「映画に出演せんか？」と言われたのは大きな驚きだったはず。そして、後にも先にも『私 ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』に1度だけ出演したことは、どの出演者にとっても生涯の思

い出となったはず。そのため、ニコラ・フィリベール監督が30年ぶりにノルマンディーを訪れると、かつての出演者たちがこぞって彼を歓迎し、あの時の思い出を昨日のこつのように語ったのは当然。

①父親の役をしたジョゼフ、②殺された母親役のジャクリヌ、③殺された妹役のニコル・ピカール、④もう1人の妹役を演じたアニック、⑤父親の隣人役のジルベールなど、たくさん出演者たちが、あの映画出演の思い出を語ってくれる。とりわけ面白いのは⑥ポレル一家で、「なぜパパが選ばれたの?」「愛人顔なの?」という娘の質問に、母親が「私の夫の演技は良かったと思うわ」と答えるシーン。こんな風に旧交を温め、あの時の思い出を語っていくシーンはたしかになるほどと思うものの、これもニコラ・フィリベール監督のノスタルジーの発露であり、単なる自己満足……?

主役のクロード・エベールは……?

この映画はドキュメンタリー映画でありながら、少しはドラマティックに仕上がっている。そこが、ニコラ・フィリベール監督の巧妙なテクニック……?

『私 ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』で主役の少年ピエール・リヴィエール役を演じた当時18歳のクロード・エベールの行方が知れないらしい。彼はこれに出演した後、俳優として大成功を収めたが、すぐに映画界になじめなくなり、俳優業から足を洗ったとのこと。そして、その後長らく消息がわからない、挙げ句には「死んだ」という人もいるというから、それではこの映画を撮る意味が半減してしまうのでは……?

映画の中盤そう思いながら観ていると、ある人が彼のメールアドレスを知っており、早速連絡を入れたところ、彼はキューバの東南にあるハイチ共和国という思いもかけない国で神父として活動していたとのことだ。そして、映画の終盤このクロード・エベールが再びノルマンディーを訪れてくることによって、映画はクライマックスを迎えることになる。なるほど、こりゃうまい演出だと感心したが、こりゃ逆にある意味ではつくりすぎ……?

ラストシーンの賛否は……?

映画づくりには、ポストプロダクションつまり「編集」という重大な作業がある。これは編集者が「NGの切り出しや、バラバラに撮影された素材をシーン順、カット

順に並べていく作業」のことで、「現場での撮影をあくまで素材作りと考えれば、まさに映画は編集によってはじめて作品となっていく」わけだ。したがって、「素材を生かすも殺すも編集次第で、現場で撮り切れなかった要素を編集でフォローしたり、時に現場の狙い以上の効果が生まれてくるのも編集の妙味と言える」（以上『映画検定 公式テキストブック』167～168頁参照）。

『私 ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』にはニコラ・フィリベール監督の父親が出演していたが、ポストプロダクションでそのシーンはカットされたらしい。ところが、助監督だったニコラ・フィリベール監督は、そのフィルムを30年後の今日も保管していたらしい。そこで、『かつて、ノルマンディーで』のラストシーンを飾るのは、『私 ピエール・リヴィエールは母と妹と弟を殺害した』でカットされた父親のシーン。

たしかに30年間の歳月の重みはこれによって実感できるが、さてその賛否は……？

2008(平成20)年3月12日記

第3章

十人十色の生き方を描く